作家解説

五百城文哉
いおき・ぶんさい　1863-1906
明治期の洋画家。小杉放菴の師。現在の茨城県水戸市に生まれる。本名：熊吉。高橋由一に西洋画を師事したのち、不同舎でも学んだ。1892 年、シカゴ万国博覧会への出品作制作のため日光を訪れたのを機に永住する。日光東照宮周辺を描いた絵画をはじめ、高山植物の研究にともなう写実性に優れた植物画を数多く描いた。

石井柏亭
いしい・はくてい　1882-1958
東京生まれ。本名：満吉。浅井忠や中村不折に洋画を学ぶ。1907 年山本鼎らと美術誌『方寸』を創刊し、翌年「パンの会」に加わる。日光にはこの年の夏に初めて訪れ、『ホトトギス』誌に、日光に取材した挿絵を 5 点寄せる。また、湯元に入る途中に見かけた山火事後の山を描いた〈火の跡〉と、湯滝の滝壺近くから見た風景〈男体山〉という 2 点の油彩画を、同年の第 2 回文展に出品し、前者で入選している。渡欧後の 1914 年に二科会を創立。1935 年帝国美術院会員。1936 年一水会を創立。1937 年帝国芸術院会員。1949 年日展運営会理事などを歴任した。

Y.ITO
1930 年代に《日光神橋》《宮島風景》などの新版画の原画を描いた詳細不明の画家「伊藤雄半」である可能性がある。この画家については、明残辻老「横浜絵物語」（『武相研究印象記：石野瑛氏還暦記念誌』武相文化協会，1949）のなかで、〈（本姓堤）明治三十年頃谷戸坂に居て仏人から洋画を学び明治の末年箱根に住し風景画を描いて居た。昭和の初に東京に移り今尚筆を採つて居る。一時米国のゴールデンウインメーヤーの嘱託絵師となつたりした事もある。恐らくは横浜絵最後の一人であらう。彼は一面我が古美術の研究で知られ、宮殿下の御前講演やラヂオ放送を度々やつてゐる〉と語られている。

入江　観
いりえ・かん　1935～
現在の日光市に生まれる。日光町立第一国民学校（現・市立日光小学校）で谷田貝憲介から油絵の手ほどきを受ける。東京藝術大学美術学部藝術学科在学中の 1956 年、第 33 回春陽会展に初入選。同年から春陽会研究所で岡鹿之助や三雲祥之助らの指導を受ける。1962 年政府給費学生として渡仏。1964 年帰国後、春陽会会員となり、現在まで同会で活躍している。1980 年代には日光の杉並木をよく描いていた。

河久保正名
かわくぼ・まさな　1849（嘉永 2）年 - ?
神奈川県生まれとされる。1876 年に国沢新九郎主宰の彰技堂で洋画を学んだ。1885～1894 年にかけて勧画学舎を開き、若き丸山晩霞や石川欽一郎、後の陶芸家板谷波山のほか、小舟杪吉、中山利壽、寺尾宗助といった門下生が学んだ。この間、1887 年に東京府工芸品共進会へ《日光陽明門》《裏見瀧》を出品しており、このとき日光との繋がりが出来たか。また妻からの感化でクリスチャンとなり、1890 年に描画手習い本『日曜学校用福音図解』を出版している。1890 年代に大蔵省印刷局に勤めながら、明治美術会や日月会に参加。1900 年パリ万国博覧会へ出品し、翌年にはトモエ会の結成に参加。印刷局退職後は日光に転居し、土産絵を描いて晩年を送る。太平洋画会の第 5 回展（1906 年）に《杉蔭》を、第 6 回展（1908 年）に《杉の森》を出品しているが、これらは日光の風景だったのかもしれない。現在確認できる最後の消息は、1914 年に刊行された『日本基督教徒名鑑』（中外興信所）の記録で、河久保は日本真光教会の委員、住所は日光町入町四軒町として記載されている。

川島理一郎
かわしま・りいちろう　1886-1971
現在の足利市生まれ。1908 年から 2 年間米国の美術学校やデザイン学校で学んだ後、1911 年に渡仏、アカデミー・コラロッシなどで学ぶ。1913 年サロン・ドートンヌに日本人として初入選。1919 年に帰国するが、その後もしばしば欧州を旅し、1922 年にはサロン・ドートンヌ会員になっている。1926 年国画創作協会第二部の創立に同人として参加。戦後日本芸術院会員となり、日展でも活躍。日光に取材した個展をたびたび開いている。

小杉未醒／放菴
こすぎ・みせい／ほうあん　1881-1964
現在の栃木県日光市生まれ。本名：国太郎。五百城文哉の内弟子となる。1899 年小山正太郎主宰の不同舎で学ぶ。この頃〈未醒〉と号し、太平洋画会に参加。1904 年日露戦争に記者として従軍。欧州留学から帰国した 1913 年、再興された日本美術院に同人として参加し洋画部を牽引。1919 年まで出品後、1920 年洋画部同人らと連袂脱退。このメンバーを中心に 1922 年春陽会を結成し、以後、同会を主な発表の場とする。1923 年から〈放庵〉の号を併用し始め、1933 年末〈放菴〉へ改号し、制作は日本画が中心になっていく。1945 年新潟県新赤倉の別荘に疎開し、この地に永住する。

武内鶴之助
たけうち・つるのすけ　1881-1948
日本におけるパステル画家の草分け的存在。幼少から絵画に親しみ、日露戦争に衛生兵として従軍後、白馬会研究所で学ぶ。1909 年に渡英後、ロンドン美術学校で油絵を学び、ロイヤル・アカデミーに 2 度入選。帰国後はパステルによる風景画や静物画を制作し、日本パステル画会の発足にも関わる。戦後は日光に移住。脳溢血で亡くなるまで日光で制作を続けた。

田辺　至
たなべ・いたる　1886-1968
東京に生まれる。東京美術学校西洋画科で黒田清輝に師事。在学中の 1907 年に文展に初入選し、以後入選を重ねる。1910 年に卒業後、同校研究科に進学。その後助手、助教を経て、1922 年に文部省在外研究員として 2 年間渡欧。帰国後 1928 年に東京美術学校教授に就任した。1944 年に退官してからは特定の美術団体には属さず、鎌倉で地域の美術振興に尽力した。

田辺三重松
たなべ・みえまつ　1897-1971
北海道に生まれる。函館商業学校在学中に美術部を立ち上げるなど美術への関心が高く、独習する。1916 年卒業後、家業を継ぎつつ道展に出品。1928 年には呉服商を廃して小学校教員となり、同年二科展に初入選。1943 年同会会員に推挙された。戦後、1945 年に同志たちと行動美術協会、また全道美術協会を設立。道内の美術界での後進指導にも大きく貢献した。

田淵　保
たぶち・たもつ　1872（明治 5）年 - ?
現在の和歌山県海草郡に生まれる。数え年 14 歳で京都府画学校に入学、田村宗立に学ぶ。1891 年五姓田義松の内弟子になるもすぐ破門され、原田直次郎主宰の鐘美館で学ぶ。1895～96 年頃に『大阪毎日新聞』のポンチ絵を担当。明治美術会に参加した後、1908 年第 7 回トモエ会展に《日光写生》を出品した記録が残る。後輩や友人たちが次々に欧州留学を果たすなか、金銭的にそれが難しい自身の境遇を恨み、明治 30 年代半ばに日光へ移り、土産絵や依頼による肖像画を制作していく。現在確認できる最後の消息は、1912 年夏に、日光で病気療養中だった思想家田岡嶺雲のもとを田淵が訪ねてきたというもの（『田岡嶺雲全集』第 6 巻）。岸田劉生「新古細句銀座通」や三宅克己『思ひ出づるまま』のなかで、日光で土産絵を描き、銀座の荒井真画堂に付き合いがあった画家として田淵の名が登場する。

ヘレン・ハイド
Helen HYDE　1868-1919
女性版画家。ニューヨークに生まれる。1891 年から 3 年間パリでラファエル・コランやフェリックス・レガメに学び、とくにレガメの影響から日本に強い関心をもつ。1899 年に来日。アーネスト・フェノロサの勧めで木版画を始める。版元の小林文七の協力のもと、日本人の彫師や刷師と共同作業で次々作品が生み出す。一時帰国後、1902 年に再来日し、1914 年に最終帰国するまで日本に住んで制作活動を続けた。

N.HISANO
栃木県出身で、1908 年に東京美術学校西洋画撰科を卒業した〈久野延太郎〉の可能性がある。

古橋義朗
ふるはし・よしろう　1924-2006
現在の日光市に生まれる。日光に来た春日部たすくとの出会いから、水彩画を描くようになる。終戦後、谷田貝憲介を中心に清晃会から発展した青光会に参加する。水彩画と油彩画を区別せず展示し、油彩画と勝負できる水彩画を描いていく舞台として、1950 年から旺玄会に出品を続ける。南画に通じる独特の感性で自然を捉え直したその水彩画は、多くの後進に影響を与えた。

丸山晩霞
まるやま・ばんか　1867-1942
現在の長野県東御市に生まれる。河久保正名主宰の勧画学舎や、本多錦吉郎主宰の彰技堂で洋画を学ぶ。明治後年に日光に滞在し、五百城文哉や小杉未醒と共に土産画を描く。日光の画商・鬼平と親しく、のちに弟子の小山周次を寄寓させている。1900 年河合新蔵らと渡米し、水彩画展を開き大成功を収める。1913 年日本水彩画会を創立し、中心となって活躍を続けた。

三井萬里
みつい・ばんり　1886-1961
東京神田生まれの日本画家。本名：勝三。小堀鞆音に師事。明治後年に東京毎日新聞社に勤務。1914 年から文展・帝展で活躍。関東大震災後、現在の栃木県日光市文挟町に移り住み、アトリエを「大鵬居（大鳳居）」と称す。「白日子」の俳号もあり、周辺の俳人たちと交流した。1937 年、弟子で正延寺住職の田中宥正に招かれて転居した千葉県船橋市で後半生を送った。

三宅克己
みやけ・こっき　1874-1954
徳島市助任町に生まれる。1891 年に来日したイギリス人画家ジョン・ヴァーレー・ジュニアの展覧会に感銘を受け、水彩画家を志す。1892 年原田直次郎の鍾美館で学ぶ。1896 年渡米費用を稼ぐため、日光を始め各地で販売用の水彩画を描いた。1897 年米英に留学。1912 年光風会を中沢弘光らと結成。文展・帝展にも作品を発表し、帝展審査員も務めた。

山下新太郎
やました・しんたろう　1881-1966
東京に生まれる。東京美術学校在学中に黒田清輝に師事し、1904 年に卒業後フランスへ渡航。ラファエル・コランやフェルナン・コルモンに学ぶ。オーギュスト・ルノワールの影響を受けながら研鑽を積み、1910 年に帰国。1914 年二科会の創立に参加。1935 年の帝展改組により二科会を退会し、帝国美術院会員となる。1937 年に一水会を創立。同年、帝国美術院の改組にともない帝国芸術院会員となる。戦後は日展顧問や国立近代美術館評議員を歴任。1955 年文化功労者に選出される。滞仏時代に吸収した印象派の表現手法を基盤に、帰国後は国内の美術界において重要な役割を果たした。

YAMANOi
明残辻老「横浜絵物語」（前掲）のなかで、〈画商山野井の伴で器用の所から画を描き初め、殊に海の画を得意とした。あまり売行は良い方ではなかつた最も彼は早くして歿した〉と語られている〈山野井晩村〉の可能性がある。横浜の山野井（山廼井）は、主に東京近郊の画家作品を扱い、吉田博や丸山晩霞の洋行費を出資していた画商で、日光支店もかまえていた。

G.yokouchi
明残辻老「横浜絵物語」（前掲）のなかで、水彩画家渡辺豊洲の弟子で〈豊洲張りの風景を描いて居た。終りには板画などやり出したが、あまり売れなかつた〉と言及されている〈横内某〉である可能性がある。

吉澤儀造
よしさわ・ぎぞう　1869-1903
現在の三重県亀山市関町に生まれる。1893 年不同舎へ入門し、小山正太郎に師事した。1899 年小杉放菴の不同舎入門にあたり付添人となっており、同年初冬に《日光の初雪》を描いている。明治美術会や太平洋画会に出品していたが、1902 年に体調をくずし、翌年欧米留学の願いを果たせないまま 35 歳の若さで没した。

吉田あぐり
よしだ・あぐり　1889-1945
洋画家吉田嘉三郎の四女として福岡県に生まれる。4 歳頃から次姉ふじをと共に絵の指導を受ける。義兄の吉田博に連れられ、風景デッサンで研鑽を積み、10 歳頃から水彩画を描き始める。その後、梅田家に嫁ぐ刺繍で生業を立てたが、40 代までは時折水彩画を描いていたという。息子 2 人を若くして結核で亡くしている。1945 年 3 月 10 日の東京大空襲に遭い逝去。

吉田 博
よしだ・ひろし　1876-1950
福岡県久留米市に生まれる。1894 年に小山正太郎の主宰する不同舎へ入門。1899 年中川八郎と渡米し、翌年にかけて米国各地で二人展を開催し大成功を収めた。1902 年明治美術会を解消発展させた太平洋画会を設立。1936 年日本山岳画協会を設立。1947 年太平洋画会会長となった。

日光杉並木街道 400 Since 1625 to 2025

絵の旅・杉並木から日光へ

2025年 5月3日［土・祝］～ 6月29日［日］

KOSUGI HOAN MUSEUM OF ART, NIKKO 小杉放菴記念日光美術館

ごあいさつ

江戸時代、徳川家康をまつる東照宮が創建されたことで、日光へ向かう日光街道、例幣使街道、会津西街道、現在の日光市今市で合流する 3 つの街道が整備されました。各街道には、家康の家臣であった松平正綱により 20 年以上かけて杉が植樹、日光東照宮へ寄進されます。やがて、1952（昭和 27）年に特別史跡、1956（昭和 31）年に特別天然記念物へ指定されることになる三街道の総称「日光杉並木街道」の誕生です。

杉並木は当初の約 5 万本から、明治維新後の伐採、戦後の自動車による排気ガス問題や自然災害によって、現在は約 1 万 2 千本まで減っています。しかし日光市では、この杉並木を未来に残すため、日光東照宮、栃木県、日光杉並木保護財団と協力して、これまで様々な保護活動を続けてまいりました。

小杉放菴記念日光美術館では、1625（寛永 2）年頃と考えられる植樹開始から、今年でおよそ 400 年を迎えることを記念し、「絵の旅・杉並木から日光へ」展を開催いたします。本展では、地域住民や観光客が日光杉並木街道について学ぶためのビジターセンターとしての役割を担っている日光市歴史民俗資料館の協力展示を起点に、当館のコレクションから日光が描かれた風景画の名品をご紹介し、あらためて日光の美しい風景を守っていくことの大切さを考える機会となることを願っています。

令和 7 年 5 月
小杉放菴記念日光美術館

「植樹 400 年記念　絵の旅・杉並木から日光へ」展
解説付出品目録
2025年5月3日［土・祝］－6月29日［日］

編集：迫内祐司（小杉放菴記念日光美術館学芸員）

発行：
小杉放菴記念日光美術館

増補第 2 版発行：
2025 年 5 月 30 日

※ 当館ホームページにてカラー版 PDF を公開しています。

日光市歴史民俗資料館
日光杉並木街道植樹400年記念移動展

400 年の誇り―
日光杉並木街道のいま・むかし

日光杉並木街道は、松平正綱（1576-1648）によって寛永 2 年（1625）に杉の植樹が始まったとされ、令和7年（2025）に植樹開始から 400 年の節目を迎えます。「日光杉並木街道附並木寄進碑」として日本で唯一、国の特別史跡と特別天然記念物に指定されているこの貴重な文化財は、長い歴史の中、多くの人々の手によって守られてきました。

本展では、植樹400年を記念し、日光杉並木街道の歴史に焦点を当て、その成り立ちから国の特別史跡と特別天然記念物への指定、文化財としての保護の歩みと未来へ継承していくための取り組みなどをご紹介します。

江戸から令和へと時代が移りゆく中で、400 年もの歳月を歩んできた日光杉並木街道は、栃木県日光市が世界に誇るべき、生きた文化財です。本展を通じて、これからも、この貴重な文化財を共に守り、未来へ伝えていくことの意義を感じていただければ幸いです。

日光市文化財課
日光市歴史民俗資料館

並木寄進碑（複製）
原資料：例幣使街道（日光市小倉）
1648（慶安元）年建立
碑文：下野國都賀郡小倉村同國河内郡大沢村同國同郡大桑村自此三所至日光二十餘年之間　植杉於路傍左右幷山中十餘里以奉寄進東照宮／慶安元年戊子四月十七日　従五位下松平右衛門大夫源正綱
書下文：下野國都賀郡小倉村・同國河内郡大沢村・同国同郡大桑村、この三所より日光に至り、二十余年の間、路傍の左右並びに山中十余里において杉を植え、以って東照宮に寄進し奉る／慶安元年戊子四月十七日　従五位下松平右衛門大夫源正綱
解説：松平正綱が日光東照宮へ杉並木を寄進した事実を記録した石碑。徳川家康 33 回忌である 1648（慶安元）年を記念して、街道の起点（神橋畔）と終点（大沢・小倉・大桑）の 4 箇所に建立されました。これらの碑と日光杉並木街道をあわせ「日光杉並木街道附並木寄進碑」として、日本で唯一の特別史跡・特別天然記念物の二重指定を受けています。

日光山真景
明治時代後期
発行＝鉢石町　小室商店

解説：『日光山真景』は、鉢石町の小室商店（小室写真舘）が販売し、日光町の観光名所の写真 98 枚を収めた写真帖です。撮影場所は、東町から山内、西町、中宮祠、湯元などです。収録されている写真の中には、明治 26 年（1893）9 月 18 日に竣工式が行なわれた保晃会之碑の写真や明治 35 年（1902）9 月 28 日に大谷川の洪水によって流出した大日堂の写真があります。そのため、本資料の写真の多くは、その間に撮影されたものと考えられます。展示部分は、「日光入口杉並木」とあり、現在の JR 日光駅そば、東和町周辺の杉並木を写しています。

日光御山之繪圖
江戸時代（18 世紀）　紙／多色木版

解説：中鉢石町の植山弥平治（弥平）家が、元禄年間（1688-1704）から幕末まで土産物として出版した絵図です。画面右端にある「律院」（興雲律院）は、享保 14 年（1729）の創建です。また、画面中央やや下に「御目代」とありますが、これは寛政 3 年(1791）にその職が廃止される日光目代のことです。つまりこの絵図は、1729-1791 年ころに日光を描いたものであることがわかります。

Texte par Emile Guimet : dessins par Felix Regamey
Promenades japonaises : Tokio-Nikko（邦題＝エミール・ギメ著　フェリックス・レガメ挿絵『日本散歩　東京―日光』）
出版社＝G. Charpentie, Paris
1880（明治 13）年刊
解説：エミール・ギメ（1836-1918）はフランスの美術収集家として知られ、1876（明治 9）年仏教美術の調査で画家フェリックス・レガメと共に日光を訪れており、本書はその際の紀行です。この調査で収集した仏像類は、パリに所在するギメ東洋美術館に収蔵されています。〈大沢で昼食を取った。（中略）午後には、相変わらず巨木が立ち連なる、美しき街道を再び辿った。／ときおり、並木道と次の並木道の間には道ができていた。青々とした路床の縁には、日本人が「車輪」と呼ぶ、五枚の花弁の赤い花がそこかしこに咲いていた。この花咲ける芝生の路床には、巨大な樹々の列柱があるが、地にむき出しになった不揃いな根が、道沿いにうねっている。それはまさにギュスターヴ・ドレの絵のようであった。／ようやく日光東照宮のひとつ手前の村、スズキに到着した。荒涼とした風景はジュラ山脈を思わせ、土地の女性たちは、ブルゴーニュ娘のように色白で薔薇色の肌をしているのだった。〉（エミール・ギメ著、岡村嘉子訳、尾本恵子解説『明治日本散策　東京・日光』KADOKAWA, 2019）

Isabella L.Bird
Unbeaten tracks in Japan
new edition（邦題＝イザベラ・バード著『日本奥地紀行』）
出版社＝George Newnes, Limited, London
1900（明治 33）年刊
解説：1878（明治 11）年 4 月に日本を訪れたバードは、例幣使街道を通り、6 月に日光に到着しました。バードは 10 日あまり滞在後、湯元まで足を延ばしています。
〈日光へは二つの街道が通じている。私は通常利用される宇都宮経由の街道を避けた。そのため二つの並木道のうち、奥州街道と呼ばれる大きな街道沿いに五〇マイル［八〇キロ］近くも続く最もすばらしい所は見られなかった。私がとった例幣使街道沿いには、並木道は三〇マイル［四八キロ］続いており、並木は集落の部分ではしばしばなくなってしまっていた。この二つの街道は今市という村で一つに合し、ここから八マイル［約一三キロ、正しくは八キロ弱］先の日光の町の入口でようやく終点となる。並木道の杉は、日光に葬られている将軍の神社［東照宮］に青銅の灯籠を一基奉納しようとしたが貧しくてできなかった一人の男が、その替わりに供物として植えたものだと言われている。今や思いもつかなかったような壮大な記念物になっている。この種の記念物としてはおそらく世界で最も壮大なものだと思われる。〉（イザベラ・バード著、金坂清則訳『新訳日本奥地紀行』平凡社，2013）

日光杉並木街道絵葉書　10 点
明治末期～昭和期発行
石井敏夫コレクション
解説：この絵葉書に写る「並木寄進碑」は、日光市小倉にある並木寄進碑です。よく見ると、並木寄進碑の右隣りに「史蹟　日光並木街道附並木寄進碑」と刻まれた石柱があります。
大正 11 年（1922）3 月 8 日、「文化財保護法」の前身となる「史蹟名勝天然記念物保存法」において、日光杉並木街道が初めて国の史蹟指定されたときの名称は「史蹟　日光並木街道附並木寄進碑」でした。この絵葉書の石柱は、史蹟指定当時の様子を今に伝えています。
現在、小倉にある並木寄進碑の右隣りには、「特別史跡　特別天然記念物日光杉並木街道」の石柱が建っています。

『日光道中分間延絵図　第五巻』
監修＝児玉幸多　発行＝東京美術
1988 年刊

『日光道中壬生通分間延絵図　第二巻』
監修＝児玉幸多　発行＝東京美術
1990 年刊

『今市ヨリ大田原通会津道見取絵図　第一巻』
監修＝児玉幸多　発行＝東京美術
1998 年刊

写真パネル
懐かしい風景と日光杉並街道 17 点
昭和時代～平成時代
小倉町 5 丁目新道工事　東武下今市駅側から日光街道を望む　1960 年ごろ／舗装前の例幣使街道　1969 年／今市市街地　今商デパートより追分地蔵方面を望む　1969 年 8 月／今市市街地　今商デパート屋上より男体山を望む　1970 年 4 月／小倉町 5 丁目歩道橋（日光街道）　1973 年 6 月／環境美化運動（日光街道）　1978 年 5 月／今市婦人会による杉並木清掃（日光街道）1979 年 7 月／第 1 回杉並木マラソン（日光街道）　1980 年 8 月／第 2 回杉並木マラソン（例幣使街道）　1981 年 8 月／杉並木講演会　鈴木丙馬氏（中央公民館中ホール）　1981 年 11 月／鈴木丙馬氏による並木の年輪測定　1982 年 5 月／第 1 回杉並木まつり　1984 年 11 月／第 3 回杉並木まつり（日光街道）　1986 年 11 月／瀬川町自治会による杉並木清掃（日光街道）　1990 年 4 月／杉並木写生会（日光街道・上今市駅付近）　1990 年 6 月／杉並木鑑賞道路（例幣使街道・小代）　1994 年 6 月／杉並木写生会（日光街道・瀬川）　1994 年 6 月

写真パネル
日光連山と日光杉並木街道
2018（平成 30）年 12 月撮影
写真提供：公益財団法人日光杉並木街道保護財団

以上、所蔵・解説：
日光市歴史民俗資料館

描かれた杉並木

日光らしい風景といえば、何でしょうか？
日本画家は、日光には山や滝など山水画になりやすい景色を求める傾向がありました。また近世までは中国絵画が手本とされていたため、吉祥画題だった松竹梅（歳寒三友）や桜、紅葉と比べると、日本固有種である杉は、画題としてあまり好まれていなかったのです。そのため、杉並木が画題になるのは明治以降のことでした。そのまま描くだけで一点透視図法になる杉並木を、西洋画を学んだ画家がモチーフに選ぶようになり、外国人への土産絵としても需要があったようです。

01030074
田淵 保《今市図》
1911（明治 44）年作　紙／水彩
31.0×50.0 cm　平成 21 年度購入

解説：日光杉並木街道のうち、日光街道と例幣使街道の分岐点に祀られている石造地蔵菩薩坐像（通称・追分地蔵尊）周辺の、活気ある情景を描いた水彩画です。画面右下の「1911」という年記により、明治 44 年の風景であることがわかります。1907（明治 40）年の地図と照らし合わせてみると、この頃、追分地蔵尊前には飲食店や雑貨屋があり、賑わっていた様子が伝わってきます。「たばこ」や「仁丹」といった看板まで描きこまれており、今市地区の当時の風俗を伝える貴重な資料でもあります。

現在の追分地蔵尊周辺（2015.6 撮影）

01030015
G.yokouchi《杉並木》
紙／水彩　49.5×33.2 cm
平成 8 年度購入

01030077
吉田あぐり《日光杉並木》
紙／水彩　48.5×31.5 cm
平成 21 年度購入

01030061
Y.ITO《日光杉並木》
紙／水彩　49.0×32.6 cm
平成 14 年度購入

個人蔵
A.SAITO《杉並木》
紙／水彩　32.5×21.5 cm
平成 30 年度寄託

01030012
三宅克己《日光》
1896（明治 29）年作　紙／水彩
29.4×49.4 cm　平成 8 年度寄贈

0104yt0002
吉澤儀造《日光杉並木》
1895-1903（明治 28-36）年頃作
紙／鉛筆　51.5×34.1 cm
平成 8 年度寄贈

0104yt0003
吉澤儀造《日光杉並木》
1895-1903（明治 28-36）年頃作
紙／墨　39.2×52.5 cm
平成 8 年度寄贈

0103yt0001
吉澤儀造《日光の初雪》
1899（明治 32）年作　紙／水彩
29.5×49.5 cm　平成 8 年度寄贈

01030033
吉田 博《杉並木》
1894-1899（明治 27-32）年頃作
紙／水彩　50.2×68.2 cm
平成 9 年度購入

01030062
田淵 保《日光駅前風景》
明治後期　紙／水彩
32.8×49.6 cm　平成 14 年度寄贈

解説：田淵保の土産絵は、社寺だけでなく、町並みや茶屋など、明治の日光の人々の生活空間を描いている点が大きな特徴でした。本作では、画面左側に「小西支店」の看板がある店を確認できることから、現在のＪＲ日光駅前の風景を描いていることがわかります。小西旅館の支店で、土産物などを販売していた小西支店は、明治期から現在地で営業していたことが、当時の地図から理解されます。日光駅前では、その背景に昔も今も変わらず杉並木の姿を見ることができます。

現在の JR 日光駅前（2025.5 撮影）

追加出品［5月13日より］
三井萬里《杉並木》
絹本着色、軸装
129.5×41.3 cm　個人蔵

解説：夫人（現・鹿沼市出身）の弟が文挟駅前で製材工場を開業したさいにお祝いに訪れた萬里は、例幣使街道の杉並木の美しさに感動し、この地への転居を決意したという。本作は本展開会後に発見され、急きょ追加展示となった。

01030071
古橋義朗《赤い杉》
1960 年代作　紙／水彩
108.8×81.8 cm　平成 18 年度寄贈

01020074
入江 観《杉山の道》
1985（昭和 60）年作 九人の会展
カンヴァス／油彩　100.0×72.7 cm
平成 29 年度寄贈

杉と社寺と

社寺は、神仏が宿ると考える樹木と切り離せない関係にあります。「日光の社寺」が世界遺産として認められた理由の一つに、神聖な自然と人工的な建造物が一体となった文化的景観を評価されたことがありました。
日光山では、室町時代後期に座禅院権別当を務めた僧侶・昌源により、山内に松や杉が数万本植樹されたと伝えられています。また日光杉並木街道の植樹で知られる松平正綱は、平行して東照宮境内にも杉を植えていました。「直ぐ」が語源とされるほど、天に向かって垂直に伸びる杉は古くから神聖な木とされていたのです。その後も再三にわたり杉苗の補植がなされ、杉は今もこの世界遺産の荘厳さを保つ大切な要素であり続けています。

01030017
YAMANOi《神橋》
紙／水彩　34.3×50.9 cm
平成 8 年度寄贈

01030052
ヘレン・ハイド《日光》
1908（明治 41）年作　紙／水彩
49.4×27.2 cm　平成 10 年度購入

解説：二荒山神社別宮・滝尾神社へ続く石畳の参道には、その脇に 500 年以上の老杉群が立ち並んでいます。室町時代後期に座禅院権別当を務めた僧侶・昌源により植樹された「昌源杉」と伝わっており、その厳かな雰囲気から「もう一つの日光」とも称されている参道です。米国人画家による本作は、二社一寺による滝尾発電所そばの参道を描いていると考えられます。

01030019
五百城文哉《滝尾神社・鳥居》
1892-1905（明治 25-38）年頃作
紙／水彩　46.7×62.7 ㎝
平成 9 年度購入

01030020
五百城文哉《四本龍寺・三重塔》
1892-1905（明治 25-38）年頃作
紙／水彩　51.2×34.6 ㎝
平成 9 年度購入

01030056
丸山晩霞《東照宮・鳥居》
1900（明治33）年頃作　紙／水彩
25.6×34.5 ㎝　平成 12 年度購入

解説：東照宮への参拝客が、ゆるやかな上り坂になっている表参道を上り、最初に目にするのが、この巨大な石鳥居です。元和４（1618）年に筑前国福岡藩主黒田長政によって奉納されたこの石鳥居の横には、高い石垣に囲まれた杉が直線上に並んでいます。まるで鉢植えのような形で立つこの杉は、境内の杉のなかでもちょっと特別な存在のように見えます。

01030013
YOKOTSUKA
《東照宮・石鳥居と五重塔》
紙／水彩　50.2×33.6 cm
平成 8 年度寄贈

01030025
小杉未醒（放菴）《東照宮・下神庫》
1900 年代作　紙／水彩
51.3×34.4 ㎝　平成 9 年度購入

解説：東照宮の表門をくぐって、最初に目の前に現れる校倉造りの建物が下神庫です。横に並ぶ中神庫、上神庫とあわせて三神庫と称され、下・中神庫には千人武者行列に用いる装束が収められています。東照宮を描いた土産絵は、誰がどの場所を描くにしても、似通った構図になってしまうことが多いなか、手前に大きな杉を配して奥に下神庫を見る本作の構図は他に類例がありません。土産絵であっても独創性を追求しようとした画家の矜持が感じられます。
本作には「Misei KOSUGI」のサインがあり、幼少時に国府浜家へ養子にいっていた未醒（放菴）が小杉家に復籍したのが 1901（明治 34）年５月であることから、本作はこれ以降に描かれた作品と考えられます。

個人蔵
鈴木清一《東照宮・石段と鐘楼》
紙／水彩　32.6×49.6 cm
平成 30 年度寄託

01030014
YOKOTSUKA《東照宮・鐘楼》
紙／水彩　50.6×22.8 cm
平成 8 年度寄贈

01030030
河久保正名《東照宮・陽明門》
明治後期　紙／水彩　50.9×34.0 cm
平成 9 年度購入

01030086
作者不詳《東照宮・陽明門》
紙／水彩　51.5×35.0 cm
平成 23 年度購入

01030065
作者不詳《東照宮・陽明門》
1900 年代作　紙／水彩
48.4×31.4 cm　平成 14 年度寄贈

01030005
河久保正名《東照宮・唐門》
明治後期　紙／水彩　48.2×31.5 cm
平成 8 年度寄贈

01030016
N.HISANO
《東照宮・神楽殿と上社務所》
紙／水彩　33.8×51.4 cm
平成 8 年度寄贈

01030018
A.Tominaga《東照宮・奥社、宝塔》
1908（明治 41）年作　紙／水彩
24.9×33.4 cm　平成 8 年度寄贈

解説：８角５段の基盤上に立つ宝塔。その前には鶴の燭台、唐獅子の香炉、花瓶からなる三具足が据えられ、この仏具の存在に、神仏習合時代の名残りを見ることが出来ます。
東照宮で最も高い標高に位置する奥社にあり、この塔に徳川家康の神柩が納められています。元和３（1617）年に二代将軍秀忠の命により木造で建てられ、その後、寛永 13（1636）年に石造へ、さらに天和３（1683）年の大地震により破損したため、五代将軍綱吉によって唐銅製へ造り変えられ、現在に至っています。奥社は昭和 40（1965）年の 350 年式年大祭を機に特別公開されるまで、一般公開されていなかったため、正体不明の謎の画家 Tominaga は、写真をもとに本作を描いたのかもしれません。
画面左側奥に大きく描かれている杉は、1970 年代から「叶杉」と呼ばれるようになった老杉でしょう。いつからか木の上部が失われ、塔のようになってしまいましたが、この木の洞に祈ると願い事が叶うとされています。本作や古写真を見るかぎり、少なくとも明治末頃は通常の姿で立っていたようです。

現在の宝塔と叶杉（2024.12 撮影）

美しき日光へ

杉並木を抜け、社寺におまいりしたら、次は奥日光へ！
日光杉並木街道は特別史跡・特別天然記念物に指定されており、皆さんはこの街道を抜けると、ユネスコの世界遺産「日光の社寺」、そして「日光国立公園」へと進んでいくことになります。日光国立公園を形成する男体山、中禅寺湖、大谷川。多くの画家がこの地を訪れ、それぞれの視点で眼前の景色を描いていきました。この最終章では、日光の美しく、雄大な風景をご堪能ください。

01030076
石井柏亭《中禅寺湖畔》
1908（明治 41）年作　紙／水彩
34.5×25.5 cm　平成 21 年度購入

01020057
吉田 博《中禅寺湖畔》
1910-1920 年代作
カンヴァス／油彩　101.8×68.4 cm
平成 20 年度購入

01020069
山下新太郎《日光中禅寺湖朝景》
カンヴァス／油彩　45.5×60.6 cm
平成 26 年度購入

01040004
川島理一郎《奥日光 湯ノ湖》
紙／パステル　42.5×60.0 cm
平成 9 年度購入

01040009
川島理一郎《男体山の春》
紙／鉛筆　15.3×24.7 cm
平成 20 年度購入

寄託
川島理一郎《大谷川の秋》
紙／コンテ　24.0×17.0 cm
平成 25 年度寄託

01040033
武内鶴之助《奥日光男鹿川上流》
1937（昭和 12）年作
紙／パステル　44.0×57.55 cm
令和元年度寄贈［木村悦雄・正子コレクション］

0102-NPAoJ21
田辺 至《秋の戦場ヶ原》
1932（昭和７）年頃作
国立公園洋画展
カンヴァス／油彩　65.2×80.3 cm
平成 24 年度寄贈

0102-NPAoJ22
田辺三重松《中禅寺湖》
1957（昭和 32）年作
カンヴァス／油彩　80.3×65.2 cm
平成 24 年度寄贈

01020076
入江 観《懐郷の山》
2010（平成 22）年作
第 87 回春陽会展
取材地：赤薙山
カンヴァス／油彩　130.3×193.9 cm
平成 29 年度寄贈

01020077
入江 観《双稜冠雪》
2012（平成 24）年作
第 89 回春陽会展
取材地：女峰山・赤薙山
カンヴァス／油彩　130.3×193.9 cm
平成 29 年度寄贈

01020078
入江 観《湖畔晩夏》
2015（平成 27）年作
第 92 回春陽会展
取材地：中禅寺湖畔 菖蒲ヶ浜
カンヴァス／油彩　130.3×193.9 cm
平成 29 年度寄贈

おかえり小杉放菴

2024 年 11 月、八王子市夢美術館にて、当館のコレクションを中心とする「小杉放菴展」が約2ヶ月にわたり開催され、好評を博しました。このコーナーでは、八王子から放菴作品が帰ってきたことを記念して、会期中の同館 SNS で人気が高かった作品をご紹介いたします。

01020068
小杉未醒（放菴）《飲馬》
1914（大正３）年作　再興第１回院展
カンヴァス／油彩　74.0×150.0 cm
平成 25 年度購入

01020011
小杉未醒（放菴）《牧童》
1916（大正 5）年頃作
カンヴァス／油彩　40.0×60.6 cm
平成 5 年度購入

01010145
小杉未醒（放菴）《雨》
1920（大正 9）年頃作
絹本着色、軸装　63.5×71.0 cm
平成 24 年度購入

01020007
小杉未醒（放菴）《泉》
1925（大正 14）年頃作
カンヴァス／油彩　179.0×363.0 cm
平成 4 年度寄贈

01040010
小杉未醒（放菴）《騎馬》
1925（大正 14）年頃作
紙／着色　37.5×26.5 cm
平成 21 年度購入

01020056
小杉未醒（放菴）《母子採果》
1926（大正 15）年頃作
カンヴァス／油彩　116.0×90.3 cm
平成 19 年度購入

01020003
小杉放菴《浦島》
1947（昭和 22）年頃作
第 42 回春陽会展［1965 年］遺作展示
カンヴァス／油彩　96.0×66.8 cm
平成 4 年度寄贈

01010084
小杉放菴《踊る良寛》
1950-1960 年代作
紙本着色、額装　55.0×57.0 cm
平成 11 年度寄贈［大木コレクション］